

令和7年度全国学力学習状況調査の結果

4月17日に、本校6年生を対象に実施された「全国学力・学習状況調査」について、結果がまとまりました。本調査では、国語・算数・理科の3教科のテストに加え、家庭での過ごし方や学習時間を問う調査も実施されています。その結果をもとに、生活習慣と学力との関係など、本校児童の学習状況についてお伝えします。

■総合結果(国語・算数・理科)

国語では全国平均より2.2ポイント高い(正答率69%)、算数は1ポイント高い(正答率59%)結果となりました。理科は、全国平均と同じ正答率(57%)でした。児童質問紙の調査において、「分からないことや知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」という設問に対し、「できている」と回答した児童の割合は、全国平均よりも21.9ポイント高い結果となりました。日々の子どもたちの努力の積み重ねが、各教科で全国平均を上回る結果につながったと考えられます。

■国語科より

成果

「話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる」問題や、「図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる」問題で、**正答率(76.2～83.3%)が比較的高い結果**となりました。前者の問題は、**話し合いの記録を読み取り、話の流れや発言の意図を理解する力**を問うものでした。

正答率が高かった主な理由は、次のことが考えられます。

1. 話し合い活動の充実

日常の授業において、児童同士の話し合い活動を積極的に取り入れてきたことで、発言の目的や話の展開を意識して聞く力や話す力が培われたことが考えられます。児童質問紙の「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め、整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」という設問に対し、肯定的に回答した児童の割合は88.6%と、全国平均よりも6.9ポイント高い結果となりました。このことから、他教科での学びも正答率を押し上げる要因になったのではないかと

考えられます。2. 記録の読み取り指導の工夫

話し合いの記録を読む際に、「誰が何を言ったか」「どのように話が進んだか」を整理する指導を行ってきたことで、児童が構造的に情報を捉える力が身についてきたのではないかと考えられます。

課題

「目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができるかどうかをみる」問題や、「事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができるかどうかをみる」問題では、**全国平均を上回っているものの、正答率(52%～57%)が低い結果**となりました。自分の考えだけでなく、相手の立場や目的を考慮したり、臆測ではない根拠となる文章や資料を選び、伝え合ったりする学習活動を今後さらに重点的に取り入れていく必要があると考えます。

■算数科より

成果

「異分母の分数の加法の計算をすることができるかどうかをみる」問題や「伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすことができるかどうかをみる」問題で、**正答率(79.8～85.7%)が比較的高い結果**となりました。正答率が高かった主な理由は、次のことが考えられます。

1. 基礎的・基本的な反復練習

単元のまとめや宿題などで、学習したことを振り返ったり、繰り返し計算練習を重点的に行ったりしたことが、基礎的・基本的な計算力を高め、このような結果につながったと考えられます。

2. 図や式を活用した数量関係の可視化

「基準量」「比較量」「割合」の関係を、図や表、式を使って情報を整理し、自分の考えを互いに伝え合う活動を取り入れたことで、式やグラフなどの意味を理解する力が培われ、高い正答率につながったと考えられます。

課題

「 $\frac{3}{4}$ や $\frac{2}{3}$ を、もとにする数(単位分数)をそろえて考える」(図1)という分数の加法に関する問題の正答率(23.8%)が低く無回答率(10.7%)も高い結果となりました。



ひろと

$\frac{3}{4}$ は $\frac{1}{4}$ の 3 個分、 $\frac{2}{3}$ は $\frac{1}{3}$ の 2 個分です。

もとにする数が $\frac{1}{4}$ と $\frac{1}{3}$ でちがうので、同じ数にしたいです。

$\frac{3}{4} + \frac{2}{3}$ についても、もとにする数を同じ数にして考えることができます。

もとにする数を同じ数にすると、その数は何になりますか。その数を書きましょう。また、 $\frac{3}{4}$ はその数の何個分、 $\frac{2}{3}$ はその数の何個分ですか。数や言葉を使って書きましょう。

(図1) 令和7年度全国学力・学習調査(算数)設問3(4)

意味が分かりづらかったり、 $\frac{1}{4}$ と $\frac{1}{3}$ の共通の単位分数($\frac{1}{12}$)を見つけるための最小公倍数の理解が十分ではなかったりしたことが、正答率の低さにつながったのではと考えられます。今後は、分数等の計算スキルを高めるだけでなく、計算の過程に重点をおき、どのように計算したのか考えを説明する活動を、より積極的に学習に取り入れていきたいと考えています。

理科より

成果

「赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、結果を基に結論を導いた理由を表現することができるかどうかをみる」問題や、「発芽するために必要な条件について、実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる」問題では、正答率が両問とも71.8%と比較的高い(全国平均より9.8~11.8ポイント上回る)結果となりました。前者の問題は、実験結果をもとに「水のしみ込み方の違い」について理由を記述する問題であり、科学的な見方・考え方をもとに説明する力が問われました。正答率が高かった主な理由は、次のことが考えられます。

1. 探究活動の充実

児童が自ら観察・実験を行い、結果を基にグループや全体で考察し、話し合う活動が結果に繋がったと考えられます。

2. 記述力の育成

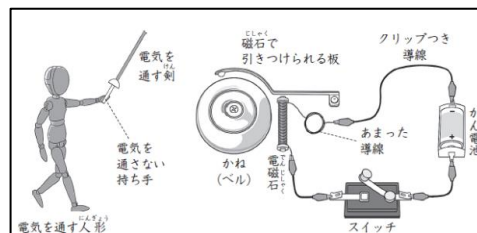
自分の考えを明確にするとともに、資料や結果をもとに分析する活動や、国語科との連携による文章の書く学習が、理科の記述問題にも効果を

発揮したのではないかと考えられます。

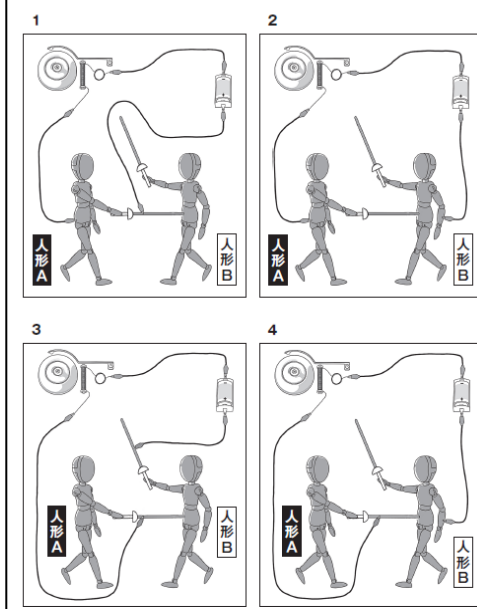
課題

「レタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を見だし、表現することができるかどうかをみる」問題や、「電気の回路のつくり方について、実験の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる」問題(図2)では、全国平均を上回っているものの、正答率(25.9~44.7%)が低い結果となりました。図2に示す問題では、電気を通す物と通さない物でできた人形を使った回路の仕組みについての問題で、単に電気が

が通るかどうかを知っているだけでなく、電気の通り道を考え、目的に応じた回路を構成する力が求められました(正答は4)。回路の仕組みを構造的に理解できていなかったことや、実験や観察の経験があってもそれを目的に応じて応用する力や資料を読み取る読解力が十分でなかったことが正答率の低さにつながったのではと考えられます。今後は、回路図をかく練習や、実物と図の対応を確認する活動を通して、構造的な理解を深められるようにしていくことを大切にしていきたいと思えます。また、「人形の剣が当たったときだけベルが鳴るにはどうすればよいか?」といった目的を設定した課題(問題解決型の学習活動)を取り入れることで、子どもたちが複数の方法を試しながら課題の解決に取り組むことができます。こうした活動を通して、思考力や応用力を育てていきたいと考えています。



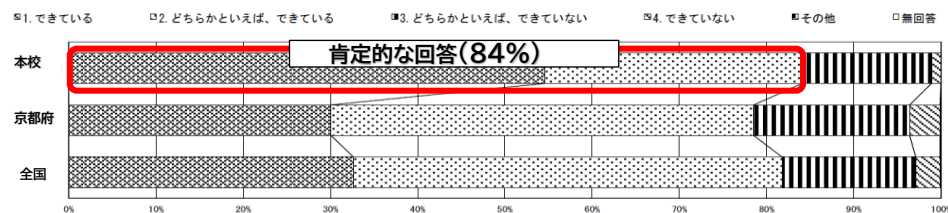
(2)「人形Aの剣を人形Bに当たったときだけ、かね(ベル)が鳴る」のは、どのような回路でしょうか。下の1から4までの中から1つ選んで、その番号を書きましょう。



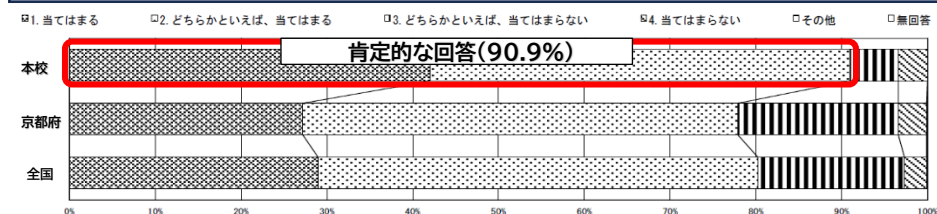
(図2)令和7年度全国学力・学習調査(理科)設問2(2)

■児童質問紙より

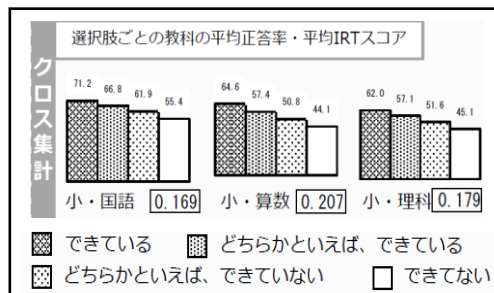
質問 分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか



質問 5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか

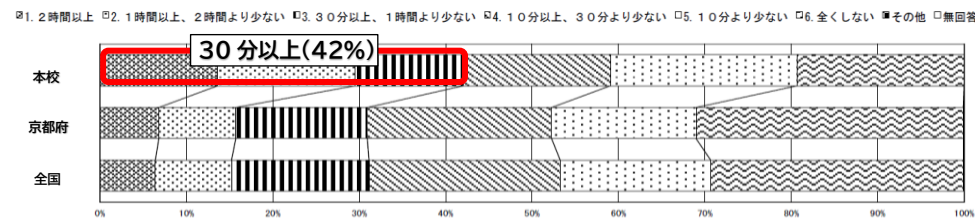


質問①「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」、質問②「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という質問では、肯定的な回答が約84～91%（「できている」「当てはまる」と回答した児童の割合は、全国平均より13～21.9ポイント高い）と、高い結果となりました。質問①で「できている」と答えた児童ほど、正答率が高いという結果が出ています（図3）。本校では、タブレット端末を活用し、さまざまな資料や考えを集めながら課題を解決する探究的な学習を取り入れたり、教科書を使うのか、友達と話し合うのかなど、学び方を自己選択・決定できる授業を行ったりしています。これらの取組が、子どもたちの主体的に課題を解決しようとする姿勢につながり、結果に結びつく一つの要因となっていることが考えられます。



(図3) 国立教育政策研究所
「令和7年度全国学力・学習状況調査の解説資料」より

質問 学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか（電子書籍の読書も含む。教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）



質問「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか（電子書籍の読書も含む。教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）」では、「1日に30分以上読書をしている」と答えた本校児童の割合が、全国平均よりも高く、正答率も読書時間に比例して高くなるという結果となりました。

上記で挙げた理科の問題にも通じますが、多様な資料やデータを読み解き、課題を解決していく力が、今後ますます求められています。読書が学力を高めることに直接的に関係するとは限りませんが、文章を読む中で多様な考えに触れたり、自分なりの考えをもったりすることが、思考力を育み、さまざまな場面で活用できる力となっていくと考えられます。

■全体を通して

子どもたちの学力や学習状況は、単なるテストの結果だけでなく、日々の学びの積み重ねや、家庭・地域とのつながりの中で育まれていくものです。今回の調査結果からは、基礎的・基本的な力の定着とともに、思考力・判断力・表現力を育む学びの重要性が改めて浮かび上がりました。嵯峨野小学校では、これからも「自ら学び、互いに高めあう、心豊かな子どもたちを育てていくことを目標に、子どもたち一人ひとりの可能性を引き出す教育を進めてまいります。また、保護者の皆様とともに、子どもたちの「学ぶ意欲」や「生活習慣」「家庭での学びの環境づくり」にも目を向けながら、学校と家庭、地域が手を携えて子どもたちの成長を支えていきたいと考えています。今後とも、温かいご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

